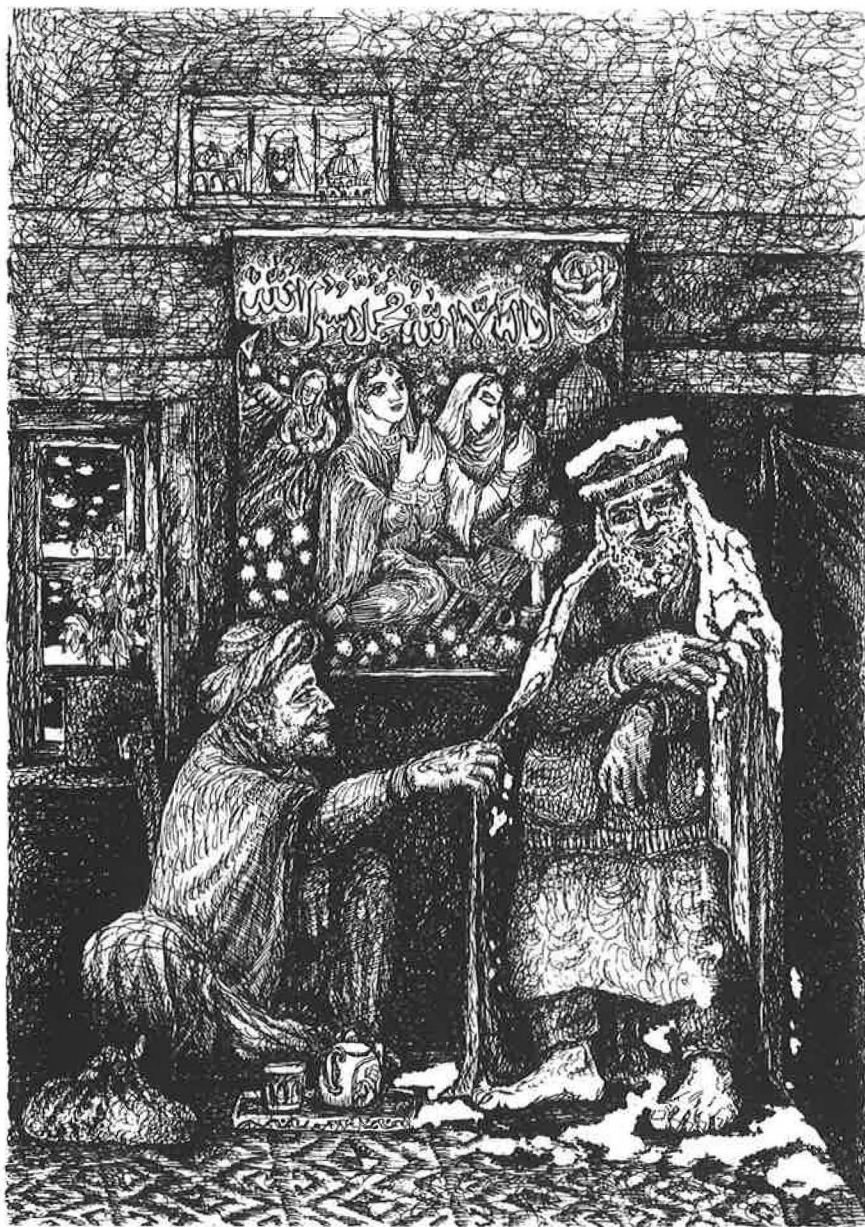


ペシャワール会報

No.26

ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名
一丁目一〇一二五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)二三七二



- 小さいながらも我々の努力は充分報われつつあります……………中村 哲
- いろんな笑顔に励まされて……………吉武英子
- 病棟での一日はぞうきん縫いからはじまった……………藤田千代子
- ペシャワールの風土と会の現地活動の軌跡(2)……………中村 哲
- 深く豊かな世界の前に立ちすくむ私……………沢田裕子
- [神と泥と人と]信じる……………甲斐大策

雪の日のチャイハナ*表紙画 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

小さいながらも我々の努力は 充分報われつつあります

JAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)顧問医師
ペシャワール・ミッション病院医師
アフガン・医療サービス顧問医師

中村 哲

*多忙な女性スタッフ

お元気ですか。こちらに来て早一カ月以上が過ぎました。当地も夜が冷えこみ、スタッフが要るようになりました。藤田看護婦さんは早くも片言のウルドゥ語で現地スタッフに慣れ、少しずつではありますが、新しい病棟で重きをなしつつあります。吉武先生も去る十月二十六日に到着され、目下お二人共、新しい現地事情に慣れるために多忙な日課です。

朝は八時頃から三時過ぎまで病棟の仕事、夕方からは買い物や料理、翌日の手術のための器具の準備、手術用シーツなどの洗濯、消毒、夜はウルドゥ語やらいについての学習、週に一度はジープに乗ってフィールドワークと、息つく暇ありません。お二人

の着任されたペシャワール・ミッション病院のらい病棟は、スタッフが僅か五名、入院患者は三十名以上で例年なら間もなく五十名から六十名にも膨れ上がります。「職務」といつても何でもこなさなくてはなりません。おまけに忙しいながらも周りのペースが日本とまるで異なりますから、その分二重に疲れることでしょう。

加えて女性が自由に歩き回りにくい世界、お二人の気苦労も日本で想像する以上だと思います。見学に来るのと実際に中で働くのでは随分違うと漏らしておられました。

*名実共に充実のセンターに

今年病棟の再編成もあって、例年の事ながら慌ただしい動きで疲れますが、ペシャワール・ミッション病院のらい病棟につ

いては、ほぼ軌道に乗る見通しです。つい先日、北西辺境州のらい根絶計画の話合いがあり、州政府のベースは我々の所に移転が決定しました。折よく、実際のコントロール計画推進役である Marie Adelaide Leprosy Centre の Phau 先生が私の家をたずね、今後の方針も話し合う事ができました。

これにて我々のらいセンターも名実共に「センター」としての地位を獲得し、官民合同の協力態勢が整いつつあります。六年前崩壊寸前であったセンターの惨めな状態を思うと、小生としては感無量です。結局、初めの予想どおり、我々ペシャワール会JAMSの実質的ならい病棟への支援なしに現在のような治療サービスの充実は不可能だった訳で、小さいながらも我々の努力は充分報われつつあります。

新病棟も約三分の二が完成し、建築で分散されていた手術場・ワークショップ共に再びセンターにおさまりました。ワークショップのうら、傷予防用サンダルのできばえも素晴らしく、北西辺境州だけではなくカシミールからも注文が殺到しています。

今後も日本―パキスタン合同チームの編

成でらい患者への医療サービスは更に充実するものと信じています。その草分け的な役割で赴任された藤田看護婦さんや吉武先生には、本当に難問が山積ですが、二人共焦らず、よく地元で溶け込む努力をしながら、辛抱強くかつ明るくやっております。本人達は気付いていないかも知れませんが、女性患者に与える安心感は想像以上で、北西辺境州政府のワーカーたちも大変な喜びようです。

*頼もしいアフガン人チーム

一方アフガン人・チーム (Japan-Afghan Medical Services) もよくやっております。現在の活動は人材育成と疫学調査を主とし、診療行為はそのための訓練ですが、アフガン人医師五名となり、かつて訓練コースで育成した診療員六名、古くからのスタッフ十一名でフルに回転しています。

今夏には北東部の国境沿いの地点に支部を置き、流動する情勢の中で待機しております。アフガニスタン内部に対しては、らしいの多発地帯のひとつであるバミヤンに偵察隊を送り込み、これにて国境地区とア

フガニスタンの心臓部で状況調査をしながら数年後に予想される安定を見越して大攻勢を準備しております。

最近、北西辺境州とアフガニスタンでは熱帯熱マラリア (悪性マラリア) の爆発的な流行の兆しがあり、アフガニスタン内部と難民キャンプで調査を進めています。十月の内部調査では、アフガニスタン内の無医地区によつては、治療に來た患者約五百名中四〇%が悪性マラリアという凄まじいもので、対策に頭を痛めているところです。

チームのメンバーは皆よく訓練されており、殆ど私が口をはさむこともなくなりました。らい病棟のフィールド・ワークも彼らの協力に負うところが大きく、頼もしい限りです。JAMSの指導者であるシャワリ先生の献身的な努力の賜物です。内戦がいつまで続くのか、殆どの難民たちは半ば絶望を通り越して諦めの気持ちのように思えますが、将来きつとらしいの多発地帯で良い働きをするものと信じております。

*各国援助縮小の恐れがらうと注意

UNHCR (国連難民高等弁務官事務

所) も大幅な規模縮小、ユニセフ (国連児童基金) 事務所は閉鎖予定と聞いております。各国NGO (民間団体) も軒並み撤退の動きです。だが、難民の数は少しも減っておらず、我々としては内戦の終結を何年でも待ちながら、これからこそが必要な出番だと考えております。

外国人たちは行きつ来たりつで混乱を起こすばかり、大方としては地元部隊を中心に立てて黙々と活動を続けてゆく事にしております。一九七九年のソ連軍侵攻から現在の難民プロジェクトに至るまで、西側東側を問わず、外国人の夢や理想や価値観の押付けこそが、アフガニスタンの人々の厄災ではなかったかと最近改めて思っております。

小生は十二月の中頃に一旦福岡に帰り、来年二月末にまた戻ることになっています。そちらも年の瀬を控えて何かとご多忙だと存じます。またそちらでお会いしましょう。ではまた。

一九九〇年十一月九日

中村 哲

＊ペシャワール便り

いろいろな笑顔に励まされて

ペシャワール・ミッション病院医師
札幌厚生病院医師

札幌厚生病院医師

吉武英子

街は生きているなあ

皆様お元気でしょうか。

私の故郷北海道ではそろそろ初雪がふり、木々は葉もすっかり落ちて閑散としていることでしょう。こちらでは、日中はさわやかな青空がひろがり大きな木にたつぷりと陽がそそいでいます。

こちらに来て三週間がすぎました。私は中村先生、藤田さんより約一カ月遅く来ましたのでだいぶ楽をさせてもらいました。

ペシャワールでは「街は生きているなあ」といつも思います。たとえば、馬車のおじさんはしっかりとたづなをとり馬を走らせ、乗っている人々は親子びつたりと肩をよせています。馬のひづめの音はとても

リズムカルです。男の人たちはよく歩き、またバスには溢れんばかりの人々が乗っており、ドアも閉められずにぶらさがっています。果物屋さんには華やかな色どりを添えています。路上のひげそり屋さん、紅茶をのみながら話をしている人々、もえさかる火の上で大きな鍋でマトンを焼いている肉屋さん、etc etc……とても親しみ深く感じます。

これは藤田さんと私の楽しみの一つです。時々ある肉屋さんに行きます。ここでは青年が肉を焼いてくれるのですが、彼の笑顔はまるで心の笑顔のようです（日本では、こんなよい笑顔はみられませんよ）。私たちはあの笑顔になぐさめられ（心が平和になり）元気づけられます。

現在とこれからの仕事

少し、病院の外の街や人々のことを書きました。このようなペシャワールが好きだと思えることは私にとって嬉しいことです。さて、病院のことですが、今のところ私の仕事は、こちらの様子をよく知ることだと思えます。というのは、傷の処置にしても、日本とはだいぶちがいます。傷にとって大切な清潔や安静も日本流にはいきません。それはこちらが悪いというのではな



真剣なまなざしで執刀する吉武医師



手術中の藤田看護婦

く、その環境を前提にどんな治療が最もふさわしいかを考えなければならぬということ。このことはまた外科の基本にもどることであります。小細工はすぐにバケの皮がはがれてしまいます。診断についても同様です。また、先ほど書いたようにこちらのことを知ることはあらゆる面において、「別世界」に来て「しまった」私たちにとって大切なのではないかと思います。そのためにはやはり言葉が必要ですね。毎夜、中村講師が出来る悪い二人の生徒のためにウルドゥ語教室を開いてくれます。

こんなふうには、ボチボチとやっています。中村先生は十二月に帰国されますが、石松先生と沢田さんも来られますので、何とかがんばってみようと思います。

では今日はこの辺で。

病棟での一日は

ぞうきん縫いからはじまった

ペシャワールミッション病院看護婦
福岡徳洲会病院看護婦

藤田千代子

あつさらーむ あれいくむ
やつと、あいさつのこの言葉がスラッと
言えるようになりました。また本場の撃ち
合いでも、結婚式等のお祝いでも鳴る鉄砲
の音にもほんの少し慣れてきました。ペシ
ヤワール会の皆様お元気でしょうか。

ペシャワールへ発つ前は、励ましの会を
持っていたいたり、一人一人の方より言
葉をいただいたり、本当にありがとうございます
でした。早いものでペシャワールへ来て
六週間が過ぎました。ペシャワールは今、
そう暑くも寒くもなく、とても過ごしやす
い季節です。夜は時々冷えこみ、最近スト
ーブをたいたりする時もあります。私達の
住んでいる家の庭に菊の花が植えてあり、
最近どんどん咲きはじめ、日本がなつかし
く感じられました。

私の新しい職場となったミッション病院

のらい病棟での仕事は、今は患者さんの傷
の手当てが主です。ほとんどの患者さんは、
足のうら傷がありこれには以前中村先生が
話された、パキスタンの人々の生活環境や、
くつの問題があるようです。

まずはぞうきん縫いから

ペシャワールへ来て、私をはじめとした
仕事はぞうきんと手術用のシート縫いです。
ここは大変ほこりっぽい所なので、そうじ
が必要なようです。また患者さんの足洗
用の洗面器や、消毒器、手術用の器械、ケ
ッテル（消毒用の入れ物）等の買い物もあ
りました。看護婦として働くようになって、
このような仕事をしたことは、はじめてで、
私の海外医療協力は、ぞうきん縫いからは
じまりました。私は日本にいる時、海外医
療協力と言うと、何か特別に大きな事でも

やっているように思えて、この言葉は好きではなかったのです。でも協力とはどうきん縫いと同じで、私達協力がしなければならぬ事は、何も特別な事ではなくて、今迄地元の人達がして来た良い事はそのまま続けて、改善したらもっと良くなるような事は改善して、地元の人達と一緒に仕事をして行く事のようにです。

ashita・ashita 明日も明日

しかし、一緒に仕事をする事は言葉の問題、考え方の違い、習慣の違いがあり、ずいぶんむずかしく、今迄何回もイライラしたり悲しくなったりしました。これは私の方え方にも問題があつて（日本のやり方が一番良いという）ここは日本ではなく、ペシャワールである事を忘れたらいけないのです。

中村先生が、日本のやり方がここでは必ずしも正しいわけではなく、ペシャワールにあつたやり方があるので

「ashita・ashita（ゆっくり、ゆっくり）」と、ウルドゥ語で言つて下さる言葉になくさめられながら現在に至っています。イライラしながらも、最近は少しづつ私もこ

のスタッフの一員になりつつあるなあと感じてきています。そして、まだうまく説明は出来ないのですが、らいの事は、私達が例えば二年間働いて、それで終わりではなく、ずっと続いて行く必要がある事も感じてきました。

厄介なブルカも貴重!?

今日は休みでした。吉武先生と顔いっばいにシヨールをまいて、近くにあるオールドバザールへ散歩に行つてみました。シヨールのつけ方がまだ下手ですが顔が出てしま

まい、大勢の男性の遠慮ない視線をものを受け、たいへん不愉快でした。でも今日はブルカを買うことができ、さっそく頭から足元まですっぽりかぶつて、あみ目の所から一生懸命キョロキョロしながらいぶん歩きました。ペシャワールで生活する為には、女性の私達でも土地勘をつける事は大切で、ブルカは貴重な物になりました。つぎはぎのウルドゥ語で買物をするのも、ぐつたりつかれますが、結構楽しいものです。しかし夕方になるとバザールから女性の姿が消えます。私達も不安になり、そそと帰宅しました。本当に女性にとっては



街中ではブルカは必需品

生活しにくい所です。女二人、力を合せて生活していかなければと、新たに感じた一日でした。

食生活については今のところ全く問題はなくすごしています（中村先生の家族の残されたみそ、しょう油を使わせてもらっていますので）。吉武先生も私もナンやカバブが好きで、ナンさえあればナンとかなりそうです。一度だけはどうしても日本米が食べたくて、朝起きた時から寝る時迄、ずっと考えていた時がありました。スワットの米が手に入り、これは解決しました。日本米にそっくりなのです。まだ下痢は一回もしていません。

ペシャワールではこれからもいろいろありそうですが、何となく好きになれそうです。

ペシャワールの風土と 会の現地活動の軌跡〔2〕

—— ペシャワールにおける会の働きの理解のために ——

中村 哲

Ⅲ. ペシャワール会の現地協力の軌跡

先に述べたように、一九八四年赴任当時、コントローラ本部の Marie Adelaide Leprosy Centre は、ミッション病院にセンターの役割を期待する事を諦めて、ペシャワールの公営病院の一角にセンターを建設していた。それでも、病床数は両者合わせて四十にも満たず、質量ともに低い状態で、当時間もなく五千名と、爆発的に増加が予想される患者のケアにとっても対応できるものではなかった。

以上の努力の経過は大略次の通りである。

(一) 足底穿孔症など合併症のケア

足底穿孔症(うらきず)とは、ハンセン病における最大の合併症で、足の裏に難治性の潰瘍を生じ、足変形の原因となる厄介なものである。当時、この治療上の対策は急務であった。

入院期間の短縮と再発の防止・または再発期間の延長に力を注ぐ一方、能力に応じて病床数を徐々に拡大した。病床数を一七八年までに四十床、一九八八年までに五〇床に拡張、冬季の多忙な時期には臨時的に六十床まで収容できるようになった。建物の老朽化と手狭さが目立ってきたので、一九八八年には新センターの改築にふみきり、一九九〇年中に六十床となる。

患者の増加に伴って、処置をルーチン化し、消毒を徹底して小器具を増やし、らい病棟スタッフがせっかく習得した技術を生かせるよう配慮した。欠乏状態の甚だしいギブス、薬品、ガーゼなども Marie Adelaide Leprosy Centre に依頼して、ふんだんに供給できるようにした。最低限必要な消毒機器などの備品も日本側の補給で支え

- そこで Marie Adelaide Leprosy Centre ・ ミッション病院両者と相談の上、以下の方針を打ち出した。
- ①入院理由の大半を占める、うらきず(足底穿孔症)のケアの能率化
 - ②うらきず防止のためのサンダル・ワイクショップの開設
 - ③最低限必要ならいの外科(再建外科)の発足
 - ④身寄りのない患者のケア
 - ⑤アフガン人患者のケアと対策

た。一九八六年から一九八九年まで専門の理学療法士を置いて診療能力の改善に尽くした。足底穿孔症のみならず、少なくとも基本的な処置は、カラチャラワルペンディなど他州の大都市に送らずとも、今やペシャワール・ミョシオン病院でできる。

(二) サンダル・ワークシヨップ

これは前記の足底穿孔症の防止を目的として、一九八五年に着手された。

一九八六年までにニーズの把握に努め、スタイルを決めた上で一九八七年から本格的な生産態勢に入った。年間生産は五〇〇から一〇〇〇足で、一九九〇年からは今までに全く良質のものを生産できるようになった。これによって、足底穿孔症の再発の避けえないケースでも、その期間を長くする事ができるようになった。一九九〇年五月までに計二〇二四足が作られ、一七九〇足が患者に配布された。

なお、足底に敷く特殊なスポンジ以外は全てペシャワール現地調達、年間六〇万円前後の維持費は日本側が病院に寄付する形で継続している。一九九二年までに、州政府側のフィールド・ワーカーと協力して

足感覚障害の全例にゆきわたらせる見通しである。サンダルの消耗を考えても、日本からの小口の支援が続けば継続できる。

(三) 再建外科

一九八六年初めまでに、気管切開、簡単な皮膚移植、指の切断などの小外科的処置ができるようになり、一九八六年夏に邑久光明園、韓国のウィルソン・レプロシー・センターの協力で、同年秋より曲がりなりにも「再建外科」と呼べるものが可能となった。

一九八八年までに、国立療養所邑久光明園、Leprosy Mission International、カラチに本部を置くMarie Adelaide Leprosy Centreの協力下、ほぼ基本的な再建外科はこなせるようになった。これは、らい根絶計画で働く総てのフィールド・ワーカー達にも励ましになった筈である。

一般にパキスタンに於けるらいの仕事は、技術的に他の南アジア諸国に比べて立ち遅れている。再建外科が可能になると、年々かなりの症例をこなさざるを得なくなり、負担は増したがスタッフの経験は豊富となった。最近ではラワルペンディなどの他施

設に応援に行く状態である。一九八六年十月から一九九〇年五月までに手術三九六例、膿瘍切開・気管切開・外科的郭清などの小外科処置を含めると一〇四一例となる。ミョシオン病院のらい根絶計画に於ける役割は、これによっても不動のものとなった。

(四) 身寄りのない変形患者の世話

ハンセン病は、結核と同様、今や治癒可能な感染症である。そのため、外来治療が大原則であり、やむを得ない合併症のみ入院させる。努めて長期在院患者を避け、隔離を目的としたかつての「らい病院」のイメージを避けることが大切で、多少の困難があっても家族の下に帰す方針を採ってきた。

しかし、変形患者の一部は浮浪化し、物乞いをしてカラチに流れて行く傾向があったのは事実で、特に中年以上の単身者に今更「social rehabilitation」(社会復帰)などと称して職業訓練を施してもいかんともしがたいのである。殊に高齢化してホームレスとなる変形患者は年々増え続けており、やがて大きな問題になるに違いない。北西辺境州では、このような患者のために昔か



スタッフと談笑する中村医師

らスワトのピールババという所にらい患者のコロニーがあるが、居住者は主として乞食を生業として、健全な状態とは思われな

い。
そこで考えられるのは、ピールババ・コロニーそのものの改善に乗り出すか、新たに家族を含めた居住区あるいは自活共同体を設定する事である。本部の行う生活保護的なやり方は、コントロール計画の初期段階で、悪く言えば金で歓心を買って早期発見に貢献させようとしたものと見ることが出来る。確かに初期はその目的には有効で

あったろうが、その帳尻は現在になってツケが廻ってきている。うなぎ昇りの生活保護予算は一九八九年には年間百万ルピーを超え、財政は間もなく破綻する。

「生活自立」のスローガンは聞こえがよいが、職業訓練にしる、子弟の教育援助にしる、都市生活向きのものである。カラチと北西辺境州が決定的に異なるのは、後者が農村を基盤にした社会であることで、カラチのやり方の模倣はかえって浮浪患者を増すであろう。このため、我々としては、州政府に働き掛けて、菌の陰性化した変形患者は他の肢体不自由者と同等に取り扱い、社会的弱者としての優遇措置をとるべく決定させ、農村生活のスタイルにあったコロニー建設が検討されている。これは近い将来の課題である。

(五) アフガン患者のケアとJAMSの発足

アフガン人患者の対策について本部の Marie Adelaide Leprosy Centre が求めているのは、進んでアフガニスタン内部まで積極的に手を打つことであった。これには欧米の宣教団体の野心が明らかに絡んでいた

ので、慎重な態度で対処してきた。ペシャワール・ミッション病院の活動の延長とするのは内外の事情から不可能であった。ミッション病院を外国宣教団体の干渉から守りつつ、有効な実をあげなければならなかったのである。

唯一の道は外国宣教団体の狂信的で無責任な分子をらしいの仕事から閉め出し、私心のないアフガン人自らの手でペシャワールのミッション病院の外にチームを組織する事であった。このため、一九八六年十月に「Afghan Leprosy Service」が日本側の全面支援で発足し、一九八九年一月から現在のJAMS (Japan Afghan Medical Service) に再編された。このJAMSアフガン人・チームは、三名の日本人ボランティアを除いて全てアフガン人で、長期的展望で無医地区の診療態勢モデルを創りあげる事を大きな目標としている。これは、現場での確かな勘によるもので、欧米NGOの次々と撤退を余儀なくされる中、着実に歩みを継続拡大しつつある。

この創設と運営にはペシャワール会が積極的にかかわり、名古屋サウス・ライオンズクラブや福岡徳洲会病院など広い層から支持を受けて活発化し、現在に至っている。

日本からの長期ボランティアも少しずつ増え、その評価は地元でも日本でも根を下ろした。

ペシャワール会自身もこれを機に、JAMSの日本側窓口としての役割が重要となり、日本の民間組織としては独自の形態をとるバイオニア的な存在となった。

(六) 早期発見の働きかけ

早期発見の重要性はいうまでもない。これについても我々は積極的に協力した。実際には、過去散発的にラジオ放送による宣伝や医学生への講義が行われたことがあったが、組織的なものではなかった。

そこでペシャワール大学・カイバル医学校公衆衛生学講座と協力、定期実習の一つとして医学生をミッション病院らい病棟に送り込ませ、らいの早期診療を徹底的にたたきこむように手配した。この結果、現在では月に二十から三十名が我々の所に送られてくる。講義もスライドなどを準備し、なるべく現地の言葉を使って魅力あるものにしたので、好評であった。一九八五年以後、ペシャワールのほぼ全医学生がこの講義を受けたことになる。

保健婦学校の生徒にも同様の実習の機会を作り、大学の内科臨床カンファレンス、州の内科学会など、あらゆる機会を利用してらいの知識の普及に努めた。内科や皮膚科からの検査依頼が増し、早期例は徐々に増加した。これによってもペシャワール・ミッション病院らい病棟の公的役割はさらに強まった。

以上のように、今やペシャワール会JAMSの手による日本の民間の役割は、北西辺境州のらい根絶計画で無視できぬ存在となった。更に、アフガニスタンの平和の到来を待ちつつ、その活動範囲はアフガニスタンの北東部に及ぼうとしている。

IV. ペシャワール会の性格

ペシャワールでの働きは、元来JOCSS(日本キリスト教海外医療協力会)が中村医師をペシャワール・ミッション病院に派遣したことに端を発する。一九八三年四月に準備会ができ、同年九月に正式に発足した。しかし、初期の「JOCSSの中村医師を支える会」という枠を超えて、次第に

独立した民間団体として活動が拡大、独自に多数のボランティアも送れるほど成長した。

JAMS(Japan-Afghan Medical Service)の発足を機に、その日本側本部として窓口の役割を果たし、良心的な市民団体・病院を束ねて、ペシャワール―日本の良心のかけ橋となっている。会員はペシャワールでの活動を通してアジア理解を深め、民間でしかできぬ貴重な国際協力団体となっている。

もともと、ペシャワール会には厳密な意味での「組織」はない。事務局も専従は居ず、夫々に職業をもった人々が週に一回集まって相当な事務量をこなしている。熱心な事務局員たちは、何かの思想宗教的背景や「理論」がある訳でもない。夫々が「アジア」に対する個人的な愛着や人のつながりで参加しており、まとまった理念や思想よりも素朴な感性と連帯意識が動機となっている事が多い。これこそが逆に会の繋がりと継続性を強固なものにし、かつ幅広いものになっている。

JAMSはペシャワール会を通して長期ボランティアを送り出す場合も、夫々の支



サンダルワークショップでは現在、月に100~200足を製作

援会と有機的な繋がりはあるけれども、中央集権的な結び付きはない。小さな主婦層・学生サークル活動や市民団体から大きな病院組織や国連・日本政府機関に至るまで、組織を超えて良心のネットワークを成し、その輪は九州・沖縄一円から全国に及んでいる。一二〇〇名の会員の層も様々で、学生、主婦、農民、労働者、医師、看護婦、教師、公務員、サラリーマン、経営者、政治家など、あらゆる階層にわたる。思想信条も、キリスト教関係者、仏教徒、「無神論者」、左翼的な人、保守的な人、ナショナリストと、極めて多様である。我々とし

ては、このような会のあり方を大切にし、一人々々の良心的な興味と動機を重視し、組織体としての体裁には、国外との交渉や契約などを除いて、こだわらないことにしている。

本会は、まことに「日本の良心の結晶」と呼ぶにふさわしい。単調な作業に追われる会の事務局員は、おおげさに天下国家を論ずることもなく、国際化の騒々しい合唱にも無縁である。しばしば自分の「ささやかで何でもない参加」の意義に気付かないでいるが、このことは重要である。小さな良心的行為の集積こそが我々の活動を根底から支えてきたのである。ペシヤワール会Ⅱ J A M S は日本人の良心という海の中を泳ぐ魚なのである。

V. J A M S における海外医療 協力態勢の展望

以上のように、一〇〇団体を超える欧米の現地 N G O の中で、我々 J A M S Ⅱ ペシヤワール会は唯一の日本の団体として、民間の力をよく結集し、活動は次第に活発化してきた。だが、我々は特別「国際協力」などというスローガンを大上段にふりかざ

してきたのではない。業績を現地に与えて自分は目立たず、過度の自己宣伝を排除し、あくまで地元の人々を立てて日本側の誇りとせぬ方針を頑なに守って来た。縁の下の力持ちである。

一般に「海外協力」を民間側から考える時、二つの問題がある。①日本側の協力態勢の整備、②現地受け入れ団体の選択と協力内容の決定である。

①の問題について、我々の実情を述べてみよう。先ず経済基盤であるが、ペシヤワール会Ⅱ J A M S の予算は設備投資を含むと年間約三〇〇〇万円（二九八九年度）、うち約八〇パーセントが個人会員及び民間の良心的な病院・市民団体の寄付からなり、残りがユニセフ（国連児童基金）や政府 N G O 補助金（ O D A ）である。しかし、基本的な底力となっているのは民間の個人・団体の継続支援である。

普通、事務局を構えて人材派遣となれば、予算の大半は組織自体の運営と人件費で消えてしまう。しかし我々の場合、日本側で使用する予算は、わずかに年四回の会報発行費と事務所の借料、ボランティアの渡航費くらいのもので、九割以上は純粹の現地

活動に使用されている。

我々がこれを克服できたのは、専従を置かぬボランティア組織という方針を貫き、熱心な会員がその時間を割いて夫々の専門的なタレントを出し合うという、まとまりを作り上げるのに成功したからである。そして、JAMSの支援者が「息の長い活動」であることを理解し、長期の構えで募金を継続しているからである。更に、「我々のニーズではなく、現地のニーズを中心に展開する」という大前提を崩さなかった事も言うまでもなく大きい。

ボランティアの出し方も、我々が「窓口役」に徹して、長期の任期の場合は送り出す医療団体にある程度の負担をしてもらい、原則的にそこが自覚的に各ワーカーを支持してゆく。会の方では必要な情報提供、受け入れ団体との折衝、募金・情宣活動に徹し、あくまで現地ニーズに合わせて人が働きやすいように配置する。このようなパターンが次第に定着している。

こうして今のところは、組織の自動性を避け、善意とボランティア精神がうまく機能するようになっている。ただ長期赴任の場合は人材を得るのにやはり困難がある。

送り出す医療団体側にゆとりがなく、相当の負担を掛ける。病院としては良い人材は離したくない。勢い、ボランティアは病院を飛び出して自由な立場で行動せざるを得なくなる。また、何年ものサービスを続けて帰国しても、日本側にその経験を評価して吸収する容量がないのである。美談としてマスコミの餌食になるか、「好き勝手に結構なご身分」と皮肉られることも多い。

逆に、組織がボランティアの面倒を全て見るとなれば、組織体としての強化・肥大を要求され、どうしても組織の都合が独り歩きする傾向は避けられなくなる。人材でも、現地に適した役割が分かるのに年余が掛かることもある。硬直した任務を機械的に処理するようになれば、一市民としての自発的な意欲はそがれ、「民間」の良さがなくなる。

民間の良さとは、小回りがきき、自由な試行錯誤を許容し、現地の実情を下から眺めて真のニーズをとらえ、本当に実のある協力が身近に芽生えることである。そして、それを通して日本の国際性とモラルが市民レベルで自然に育つことである。もし日本の医療組織に、人や財源を送ることによる

負担を軽減する便宜と評価が与えられれば、ことさら巨費を投ずる「国際医療協力組織」の創設などは相当整理することができ、民間の良心的な交流拡大を期待することができよう。

第二に、カウンターパートとなる現地団体と協力内容の問題である。一口に「現地のニーズ」といっても多様な訳で、「これしかない」というものはない。これは、長い時間をかけて現場で読み取るセンスと、それをくみ取る日本側の度量が必要である。このためには、短期ではどうしても中途半端になりがちで、じつくりと腰を据えて実情を見る、いわば「屯田兵」的な存在が必要である。官民を問わず犯しやすい過ちはしばしばトップレベルの話し合いで肝心の住民の頭越しに論議が進み、現地から見るとおかしなプロジェクトが決定されることである。

単に人材派遣といっても、現地には医者は失業するほど溢れているし、かといって現地に病院を建てて医療従事者を吸収しても、それを維持する力が現地にはない。現地住民の福祉と協力効率のバランス論から出てきた「コミュニティ・ヘルスケア」の



募 集

JAMS 発

「共に歩む」ボランティアを!!

JAMS では日本からのボランティアを募集しております。ただし、JAMS は出来上がった団体ではなく、熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ボランティアを歓迎します。

短期長期を問わず受け入れます。送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、ボランティアたちは短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地ではこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象：

1. 医療技術者（医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、簡単な日常英会話ができる者。

② 6カ月以上の滞在者は、現地で1カ月、ベルシャ語またはパシュトゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。

③ 派遣団体などからのサポートのない場合、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費の一部を負担します。旅行傷害保険は自前です。ボランティアとしての報酬は期待できません。

④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。

⑤ 現地のビザや身分は、現地パキスタンの行政機関と協力して保証し、最大限の安全も図ります。詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

Japan-Afghan Medical Service

流行とても、欧米側のアイデアであって、アジアの伝統社会の厚い壁に阻まれているのが現状である。

更に、先進技術の移行が必ずしも悪い訳ではない。問題は自国式のコピーでは駄目だということである。有効な協力方法は大小も無尽蔵にある。ただ我々に分らないだけである。

最近「NGO育成」が叫ばれ、欧米のNGOとの比較論から出た意見をしばしば耳にするが、ペシャワールで見ると、ずいぶんいい加減なやり方と惨憺たる結末も多かった。欧米NGOの規模と活動力だけに目を奪われて肝心の現地を忘れてはならぬ。

素直に「現地からニーズを訴える」という視点を身につけ、しかも蛇のごとく聴く、地についた独自のやり方を模索すべきである。そして、それが切実に求められている時代に我々は突入していると思われる。

我々の活動は、近い将来、パキスタン北西辺境州とアフガニスタンにおける根絶計画の要となり、長い長い年月をかけたが、アジアの同胞としての目の高さを失わず、利害を超えて真実のアジア理解を提供する場を設定する事になる。さらに、ごさかしい日本人論や経済優先の思考を打ち砕き、破局への不安をも包みこむ豊かな

人間理解を提供してくれるだろう。我々は小田原評定よりも実弾を重視する。そうしてこそ、身近に触れる何物かを期待するからである。

(了)



一九四六年福岡市に生まれる。一九七三年九州大学医学部卒業。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッション・ホスピタルに赴任。らいを中心としたアフガン難民の診療に携わりと共にJAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)を設立、長期的展望に立ったアフガニスタンでの医療活動をめざして現在に至る。著書に『ペシャワールにて』(石風社)、『ペシャワールからの報告』(河合文化研究所)がある。

□ペシャワールを訪ねて

八尾徳洲会病院の小藤田、名島のお二人が、十一月二十五日からの一週間、ペシャワールを訪ねられましたので、早速訪問記を寄せていただきました。

ワーカーとしての中村先生

八尾徳洲会病院
医療ソーシャルワーカー
小藤田 浩美

期待と不安と

十一月二十五日から約一週間の滞在予定でペシャワールの中村先生を訪ねました。僅か一週間の滞在では何もわからないことは百も承知で、その上「何をしに行くの？」という同僚の遠慮のない素朴な質問に上手く答えられず、期待と不安の混ざった心境で発ちました。

日本で医療ソーシャルワーカーという仕事をしている私は、毎日多くの患者さんの生活と向き合っています。社会が、豊かに、複雑になっても、患者の周辺にある生活の

問題は解決されていない。また、実際に患者の生活の内容、地域を知り得なければ、本当の意味での援助はできないのではないだろうか……。このような焦りと戸惑いを持つ私にとって、中村先生のペシャワールでの医療活動は興味深く、先生が何年もかけて創ってこられたもの、これから創っていくかのようにしているものを実際に見て、心を感じたいという思いでペシャワールでの生活を送りました。



病院の中庭でくつろぐ患者

街を知り、人を知る

中村先生と話をしていると、先生がいかにこの街を愛し大切にいらっしやるかが伝わってきます。街を知り、人を知り、そこで結ばれていくつながりを大切にしながら何年も活動されてきたのだと改めて感じました。先生の存在はただの「医師」ではなく、日本語では表現が難しいのですが本当の意味での「Worker」に違いなと信じております。

ペシャワール滞在中、何度かバザールを訪れました。顔を履ついてもバザールを歩く時は緊張するのです。つきさすような視線に身を固くし、顔をふせて歩きます。しかし、物を手にとったり、言葉を交した時に人々の表情が緩み、心からの笑みを私に見せてくれます。ペシャワールのそんな緊張感と暖かさが何だか中村先生に似ているなど思い僅か一週間の滞在さえ懐しく思われる出されてなりません。現地では本当に多くの方々にお世話になりました。紙面をお借りして「ありがとうございます。私もペシャワールが好きです」とお伝えします。

銃殺刑なのです。グヒヒ

八尾徳洲会病院研修医 名島 将浩

街中をふらつきました

やあ、どうも。なんとか無事にペシャワール見学ツアーより帰ってまいりました。見学などといっても私など実際、病院の中にいたのは都合一日ぐらいでありまして、じゃあ一体何をしていたかともうしますと、ひたすら寝て、ウマイモンを食って、あと



難民キャンプ

は街中をふらついてたわけで、どうもお恥ずかしい話です。正体不明の日本人が、病院内をうろろするの患者さんには迷惑な話だし、現地スタッフも結構忙しそうなので、海外協力は地元理解から始まるのだの自論にのっとって街に飛び出して行っただけです。フィールド・ワークもついて行きたかったのですが、わずか一週間の滞在ではスケジュールが会わず無理でした。うむ。

氷河の流れるように

欧米の多くのプロジェクトがその性急さのために次々潰れていく中で、ミッション・ホスピタルおよびJAMSの活動はあたかも氷河の流れるようにゆっくりではありますすが着実に広がりとつあるようであります。ドクター・中村のあくまでも現地の風俗習慣を尊重しつつ事を進めていくというやり方は海外援助の理想の姿であると思います。「現地の生活に慣れるのに半年、言葉が分かるようになるのに半年、最低でもこちらでまともに仕事ができるようになるのには一年かかります。こちらに来ていただけのならばどんなことがあっても一年間は帰国



JAMSのオフィスで見学者に説明する中村医師

せずにやっていただかないと。もし途中で逃げ帰るようなことがあれば、イスラムの掟にしたがって銃殺刑なのです。グヒヒ。」と不気味に笑うドクター・中村であります。それが向こうのやり方ならほんまにやりかねんなあとと思うのであります。わが徳洲会病院も命が惜しくばくれぐれも、ゆめ援助を打ち切るなどということのないよう末永くお付き合いをしていかなくちやあならんと思う次第でありました。吉武先生、看護婦の藤田さん、お二人ともとても元気です。ご安心下さい。

「私のペシャワール」が問いかけるもの

ペシャワール会事務局

沢田裕子

深く豊かな世界の前に

立ちすくむ私

外国人であり、女である私がペシャワールで浴びる人々の視線は、とにかく強烈だった。

たとえば、レストランへ行き、女性同伴客用の別室へ男ばかりのフロアを抜けて向かうとすると、彼等は一斉に私に振り向き、その視線はじっと私の行く手を追った。それは何か、あまりに明らかに、内心ぷつと吹き出したくなる程だった。

ジロジロと見るのは、男ばかりではなかった。バザールでブルカを被った女性に、頭の前からつま先まで、まじまじと「眺め」られて前に進めなかったことがある。パキスタン人スタッフに混じってのフィールドワークに出かけた農村では、宿泊先の宿に、子供達が私を見ようと押し掛けて来た事もあった。そこでニコッと笑えれば、

素晴らしい笑顔が返って来たのだろうと思うが、その時は過度に浴びる視線にうんざ



子供を抱く女性患者

りして、顔がこわばってしまい、子供たちはがっかりとしているようだった。

投げられた石ころ

JAMSのことだった。理由は忘れたが、その日私は、二階の事務室に通じる階段を何度も昇り降りしていた。降りて来る度に、前庭で子供を抱えて診察を待つ母親と目が合った。黒いパルダをまとい、芝生に座り込んだ彼女は初め私を不思議な物を見るようにしていたが、何度目かになると、お互い、目に微笑みを浮かべるようになった。私は何かに忙しく、その後どこかへ出かける事になった。車を待つ間、前庭横の、門のそばの日向に腰を下ろしていたが、その母親のことはもうすっかり忘れていた。

車が車庫から出て来るのに、いつもより手間取っていた。と、ドスン、と何か、私の背後に物が落ちる音があった。振り返ると、拳よりひと回り大きな石である。更に後ろを見ると、先程の母親がいた。私は初め、彼女が私にぶつけようとしたのかと、ムツとしたが、彼女はニコニコしている。その頃の私は、いつもいつも向けられる



ペシャワールの果物屋

視線に辟易としている時期だった。その日も振り返った私に微笑みかける彼女に素直に微笑み返すことが出来なかった。同時に車が来たので、私はもう、その母親を振り返らず、車に乗って出かけてしまった。後で考えるに、彼女は私にずっと声をかけていたのだと思う。私を看護婦だと思って、何か聞きたかったのかも知れない。でも、私は考え事をしていたのか、ただぼんやりとしていたのか、何も聞こえていなかった。何度声を掛けても振り返らぬ私に、彼女はとうとう石を投げたのだろう。決して悪意などではなく、ただ、私を「呼ぶ」ために。

そう思うとさっさと車に乗ってしまったことが悔やまれる。

人間性の幅と深さ



先日福岡で、会報の表紙の絵を描いて下さっている甲斐大策さんの「ペシャワールの猫」の個展会場に行き、お話しを聞かせて頂く機会があった。その時に、むくつききジハードの戦士が、流血の戦いで敵の生首をかき切ったその同じ手で、今度は小鳥を包みこむように抱き、餌を与えては可愛がる話になった。私も実際にそのような人を知っていたので、どうも私には今人を殺した者が小鳥を可愛がるなんて、アンバランスでイメージが結び付かないのですが、と言うと、甲斐さんは、それはむしろ人間の「幅」の問題なのではないか、と言われる。それは語弊があるかも知れないが、残酷さも優しさも、大きな振幅の中で受容できる、人間の包容力の広さなのだ、という風に私なりの理解をさせて頂いた。

だとすれば、私の「幅」の何と狭いことだろう。あの時、あの母親に微笑み返せなかった私。「石を投げるなんて」と、ムッ

とした私。過度の視線に不快さしか示せなかった私。彼らの深く、豊かな世界にも、その「異質さ」の前でとまどい、足を踏み入れることも出来ずに立ち往生している私。それも全て、私の「幅」の問題であったのかも知れない。

今、顔も、手足も出し、自由に歩くことのできる福岡の街。人々の視線に取り囲まれることもなければ、当然ながら、石で呼ばれることもない。物乞いをする人々の姿もなければ、排水をすくって飲む少年の姿もない。でも、あの、人の良い物売りの明るさや、懐かしい感じさえる、好奇の混じったおせっかい、心を洗われるような笑顔も、胸が熱くなるような真摯な眼差しもない。あるのは、ものの豊かさのなかでかえって心は「貧しく」なって行くかのような日本。「幅」が痩せ細って、膨らみの無い私達の生。そしてその間で、未だ整理のつかぬ頭を抱えて、フラフラと頼りない私自身。

ペシャワールでの七ヶ月、そしてそれからの「私のペシャワール」は、ずっと私に、人間の「幅」の問題を問いかけているのかも知れない。

七十歳を上回ると自称するその小柄な爺さまは、ペラハン（上着）から胸をはだけ、白い毛がとりまく小さな乳頭を両手でもみ上げて笑う。若い女房をいつも満足させているのは、川魚の頭の煮込みのおかげだ、と私に訓示を垂れるようにいう。そして、その家の若い主人の方に顔を向けた。

「金返せ」

それまでの世間話と同じ調子で爺さまはこのことばを發した。すでに五日、爺さまは一時間おきに、金返せ、といつていた。

ペシャワールの新市街には、外国人を相手にカーペットを商う店が何軒かあるが、その中のひとつはカーブルからの難民がオーナーである。そのオーナーに何かの事情で金を貸した爺さまが、戦いの中を抜けてカーブルからやってきて居坐り、金返せ、をくり返しているのだった。英国が印度を支配していた頃から印度亜大陸全域に、パ



文・画 大策 斐甲

信じる

から旅のスタニスガフ

シュトゥウンの金貸しは有名だった。抵当なし、証文なしの融資と、その取り立ての凄さを印度人達は首をすくめて語る。

「あんた、パシトゥウンは地の果てまで取り立てに来ますよ。代が変わっても来ます。入口にぬっと立って、金返せ、と一言。いつでも、どこまでも来ます。大きな手足でね……」

私の友人のあるパシトゥウンは、ローンで車を買った。車は戦いで消え、友人は難民としてパキスタンへ流出した。その友人と私がパキスタン北部を旅していた時、カーブルからの借金取りは、私達の行く先々に必ず現れた。

「日本の方、あなたの兄弟の借金です。私も彼もあなたもムジャヒディンです。肩がわりして払ってくださいませんか」

その青白い顔の借金取りは、戦場での写真だ、と何枚かの武装した自分の写真を見せてくれた。後で私の友人は吐き捨てるよ

うにいった。

「あいつが戦場に出るわけがない。金持は戦わないよ」

このカーブルの男にとっても戦いと借金は無関係だった。

「そのうち結局は返すことになる」友人は、自分に言いかけせるようにそういつて、溜息をついた。

平和な頃のアフガニスタンで、私は、何十回証文なしのツケで買物したかわからない。こっちで気にして、品名と価格に日付と私のサインを加えた紙を書こうとすると店主達はいった。

「そんなもの、ただの紙つきれです。今度来た時に払ってくればいい」

私に借金を踏み倒すだけの度胸がない、と見すかされたのか、信じれる男と認められたからか、いつもはつきりしないまま私は日本へ戻ったものだった。

インシャ・アツラー

私がそんな借金を重ねた相手は、いずれも移動民の血をもつ人々である。印度で借金すると証文を書かされた。旅券の番号を控えられたりもした。そして彼等は言う。

「あなたのことは信じてますよ。疑うものですか、お互い友人じゃないですか、いや、兄弟みたいなもんです……しかし、念のため……」

アフガニスタンの人々は、多くをしゃべらず、いいから、という表情で笑っている。

「どうして信じれるのだろうか？」

私の疑問に、何人かの店主や友人は同じ答えをした。

「あんたがきちんと払うかどうか、インシャ・アッラー（神のみぞ知る）だ」

嘘しか言わない

アフガニスタン側に住むパシュトゥンの中で最も剛直で誇り高く、むしろ愚直ともいえるバクティア州出身の友人に、故郷の人々は信じ合っているのか、嘘はつかないのかと尋ねたことがある。

「嘘？ つくもつかないも、皆、嘘しか言わないよ。お互い何にも信じちゃいない。それどころか、盗む、殺す、ひどいもんさ」

この友人は大声をあげて笑ったものだった。この男の仲間も皆、そうだそうだ、皆嘘つきだ、と微笑していた。

しかし、その彼等と私との間で二十年以

上、表面的な小さな出来ごとは別として、

基本的な嘘は一度もなく、

信頼の度合は、私自身や

私達の社会がもっている

ものより遙かに強く大き

かった。

自分達は嘘つきである

と公言する彼等の方が私

よりひとを信じている事

実に私は今日でも混乱し

ている。しかし、移動民

の血が、眼に見えるもの

を大して信ぜず、もつと

何か抽象的なことだけを

信じているらしいことは

判ってきた。手でさわれ

る物のはかなさと無意味

さを知り、生死をかけて、相手のことばを

信じ、裏切りがあれば、死を与える。それ

を愚直な後進性、とは私は思えない。

移動民と定住民

彼等との多くの旅の日々を、時には生命の危険も含めて経てきた今、移動民はひと

とかかわり合う時、相手を信じてることから

始める、と私は確信している。定住民は、

疑うことから始める。

そして、時をかけて信

じられる部分を探る。

武士に二言はない、と

いうせりふを誰がいつ

言い始めたか知らない

が、武士がそれを言っ

たとは思えない。武士

の誇りを示すせりふだ

とすれば、相当にこっ

けいな表現である。

さまよっていた頃の

武士は嘘もつかず、し

ゃべりもしなかっただ

ろう。動いている人間

は、相手を信じてこと

でしか生きてゆけないのではないか、と最

近思うのである。

嘘をつく唯一の生物としての人間を知り

つくし、しかし、信じてことで生きる移動

民と、嘘をつかないと言いながらひとを信

じない定住民、私は、自分が移動民と定住

民のどちらに属しているのか知りたい。

(本文は、本年二月〜三月、「西日本新聞」文

化面に二〇回に亘り連載されたものです。加筆

の上随時掲載いたします。)



●事務局だより

*本文にもありますように、吉武・藤田さんから元気な手紙が届きました。お二人ともイスラム社会の不自由さにもめげず、勤務にくらしに勤しんでおられるようです。何よりもお二人の存在が、らい病棟の女性の患者さんに心から喜ばれている様子で、嬉しいことです。初めての異国での年末・年始、体に気をつけてお務め下さい。

*今年も暮れようとしていますが、昨年引き続き世界は大きく揺れ動いています。中東危機や自衛隊海外派兵、平和協力隊の創設問題、そしてその底流にある日米問題なども、「ペシヤワール」というもう一つの「眼」を通して見ると、排他的に「平和と繁栄」を享受している日本国民の「眼」に映る世界とは、ずいぶん違ったものに見えるようです。如何でしょうか。また、ひとりの元プロレスラーで素人政治家の単純明解な行動力の方が、友人政治屋の老獪な御託よりも、現実を切り拓く力があるというのも何か象徴的でした。私たちも決してプロに墮することなく、いつもアマチュア精神で虚心に対処して行きたいものです。

*さて、投稿のお願いです。本会報は、現地での中村先生をはじめとする各ボランティア・ワーカーの活動状況と現地事情を、会員の皆さんにお知らせすることを第一義的に考えていますが、会員の皆さんがそれをどのように受け止めていらつしやるか、ぜひお聞きしたいと考えております。各ボランティアの体験を共有しつつ、より豊かな経験へと普遍化して行くためにも、さまざまな声を載せてゆきたいのです。気軽にお願ひします。

*最後になりましたが、今年もたくさんの個人、グループの方々から暖かいご支援・募金が寄せられました。誌面を借りまして心よりお礼申し上げます。また、事務局メンバーは毎週水曜日に集まって、事務処理、会報の編集・発送等の作業をやっておりますが、週一回の作業のため事務処理が遅れたり、時にはミスも発生いたします。お気付きの点は遠慮なくご指摘いただきますようお願いいたします。

*よいお年を!
〔お願い〕当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMCA内ペシヤワール会宛でお願いします。
(〒810 福岡市中央区天神一丁目10-24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9-65559 ㊧六一七四〇)

ペシヤワールにて
— 瀨(せ)としてアフガン難民

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ
中村哲著 四六判上製 二〇頁 一五四五円

ペシヤワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治的不安定、宗教対立、麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、およびその発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。
(著者「あとがき」より)

せきふうしゃ
石風社

福岡市中央区大名1-2-15
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇-二五 上村第二ビル三〇七号 ㊧七三一一二 三七二) 内におく。